

障害者の自立 舞鶴の西地区でも手助け

授産施設「みずなぎ高野学園」

建設工事 GO

障害のある人たちに自立の手助けをすすめる授産施設「みずなぎ高野学園」の建設工事が、舞鶴市野村寺で始まった。来年四月にはオープン予定で、これまで同市西地区にはこのような施設がなかったため、期待を集めている。

社会福祉法人「みずなぎ学 通所施設で、せつげんの袋詰園(隅山陣理事長)が、同 めなどの作業を予定。園生は市東地区の鹿原に次ぐ二つ目 近く募集する。建設費は国との施設として、高野小跡地の 府、市の補助金を加えて一億 一部を無償で借り受け建設を 千五百万円。

進めている。建物は鉄骨平屋 同市鹿原のみずなぎ学園 建て四百八十平方、内部に (岡本四寿園長)は、定員三 作業室や食堂、事務室、相談 十人の精薄者通所授産施設と 室など設ける。定員三十人の して昭和五十五年にスター

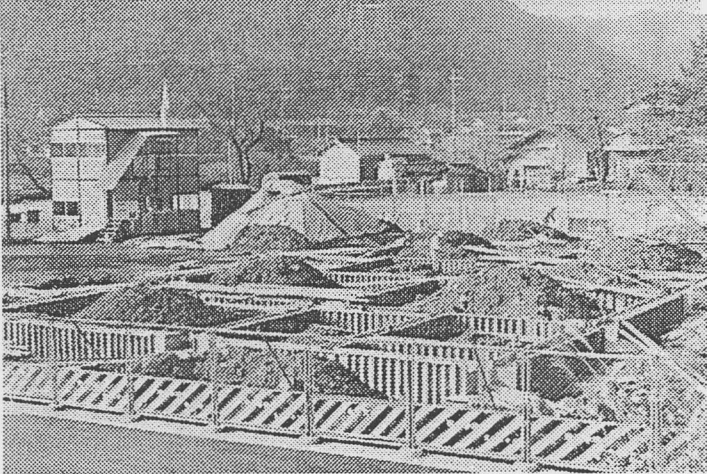
4月オープン 園生近く募集

ト、五十八年には定員六十人の入所部門も開設した。今では通所部門も五十人に拡充、社会的自立に備えて技術を磨く場として、同市内の八十一歳代の人たちが、農作業や縫製、物流用パレットづくりなど行っている。

障害をもつ人たちの就職はなかなか思うにまかせないのが現状とあって、同学園には長期滞留者が多くなる傾向といふ。

その影響で養護学校高等部卒業後どこにもいかず在宅している人は、同市内だけで三十人余り。といつて敷地に制約があつて現在の施設をこれ以上拡充できないといふ、西地区から遠く通所が大変なため、新たに西地区に施設を建

始まった「みずなぎ高野学園」建設工事



平成3年4月30日

お年玉付きはがきの
寄付金で新送迎バス

舞鶴の「みずなぎ学園」

郵政省のお年玉付き郵便はがき寄付金で購入した舞鶴市鹿原、授産・更生施設「みずなぎ学園」の新しい送迎バスが三十日、同園に到着、東舞鶴郵便局の関係者と園庭で引き渡し式をした。

同園は、送迎バス三台のうち一台が老朽化したことから、昨年五月に府社協を通し

て補助を申請。同郵便局の仲介もあつて、マイクロバス(二十九人乗り)購入費の約六割にあたる二百五十三万円の寄付金交付が認められた。

贈呈式では、本沢華雄・東舞鶴郵便局長から同園の隅山陣理事長にバスのキーが手渡され、同理事長がお礼を述べた。新しいバスは同市高野の授産施設「みずなぎ高野学園」に配置し、西舞鶴地区全域からの通所者二十八人の送迎に使つ。

1989年(平成元年)12月5日

精神薄弱者の授産施設

みずなぎ高野学園が起工式

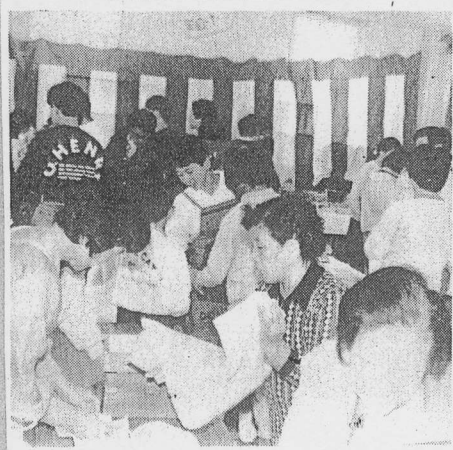
社会福祉法人・みずなぎ学園(隅山陣理事長)が市内野村寺の旧高野小学校跡地に建設する「みずなぎ高野学園」の起工式が七日、関係者多数が出席して現地で行われた。みずなぎ学園は、精神薄弱者の授産、更生施設として昭和五十五年、市内鹿原に開通所の授産部が五十人、全寮制の更生部が六十人という定員で、現在定員いっぱいを受け入れているが、授産部には入園を待っている対象者が三十人ほど見込まれている。

野村寺に建設するのは通所の授産施設で、定員は三十人。鹿原の同学園と同様、野菜作りや動力ミシンを使っている縫製などを指導するほか、同学園特製の洗たく用粉石けんをここで袋詰めし、西地区の利用者に配布する計画。敷地は高野小学校跡地の一部約一四七〇平方メートルで、市が整地し、無償貸与した。施設は鉄骨パネルコンクリート造の平家で、作業室二〇平方メートル延べ四八〇平方メートル。職員は、国の規程に従って施設長一人、事務職員一人、指導員五人、給食係二人を配置する。

他地域を結ぶ交通手段は、京都交通の路線バス・高野線が十月に廃止されたため、自家用車などに頼らざるを得ない。このため、同学園ではスクールバスを出し、通所者を送迎することにしているが、保護者や関係者の訪問に支障が出ることは避けられない。

起工式を前に、現地ではすでに基礎工事がスタートしており、今後は来年四月のオープンを目指して建設工事が本格化する。

平成元年 11月 12日
第6回みずなぎ学園文化祭



授産部の作品も並んだバザー会場

家族、ボランティア アらと楽しい一日

みずなぎ学園

市内鹿原の精神薄弱者の更生・授産施設「みずなぎ学園」をあげようと毎年開いてお

六回目。午前中は更生部音楽ラフ、授産部の舞台発表があり、練習の成果を精一杯に披露。園庭ではうどんやおでん、お好み焼きを販売するテントが並び、どこも長い列が出来る人気ぶり。

同学園では、授産事業として陶芸、縫製、農芸などの指導が行われているが、園生たちが日頃取り組んだ作品のバザーもあり、こちらも大盛況。それ以外にも、園生が独自に作り上げた自慢の作品を展示したコーナーも作られた。

午後からは、保護者やボランティアのアトラクションも行われ、学園内には終日楽しい歓声が響いていた。